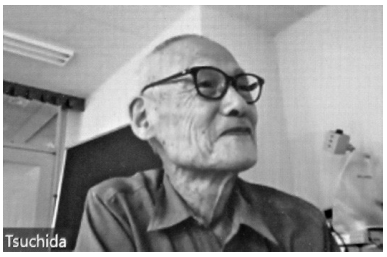
オンライン
新春鼎談
実施日：2021年10月14日

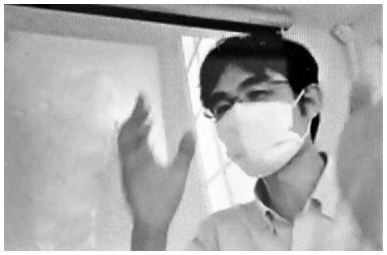
歴史と現場の思考に学ぶ

精神、戦争、地球の危機

いまこそ求められる有機農業の思想



槌田 劭
使い捨て時代を考える会相談役
本会幹事



藤原辰史
京都大学人文科学研究所准教授

魚住道郎
本会理事長

『土と健康』編集部では、2022年新春号の巻頭に藤原辰史さんと槌田劭さんとの対談を企画しました。お二人との連絡役を引き受けていただいた魚住理事長も参加することになり、この鼎談が実現しました。日本の有機農業運動50年をふり返り、次世代にメッセージを託したいとの願いが込められた鼎談です。　（文字起こし　藤田妙子）

農業や食を通して20世紀を研究する　藤原

藤原　私は１９７６年生れで、槌田さんが大学の先生になられたあとに生れた世代です。魚住さんは私のオヤジぐらいの世代で3人とも違う世代を生きてきました。私はすでに使い捨て時代が始まった大量廃棄社会の中で幼少時代を過ごしてきました。地方出身で、北海道の旭川に2歳まで、あとはほとんど島根県の出雲地方にいました。実家が米の兼業農家で仁多米（にたまい）の産地です。木次（きすき）乳業さんも近いところにあります。農業の現場からそう遠くないところにいました。

京都大学に入り、ナチスの歴史を池田浩士先生から学びました。池田先生はドイツ文学者ですが、ある講義で槌田龍太郎、槌田敦、槌田劭という名前を書いて、「こういうおもしろい人がいるから、農業を研究している藤原くんも読んでみたら」と言われて。

そういうこともあり、ナチズムの戦争の時代の農業や食に関心を持つようになり、今に至ります。20世紀というファシズムの時代、冷戦の時代、どちらも大きな国同士が衝突した時代に、兵器だけでなく食べることも現代史の中心にあったはずなのに、歴史学の研究者は食べること耕すことを無視ないし軽視してきた。そのことに違和感を抱きました。

農業史は盛んですが地主小作関係や土地制度に集中していて、どんな気持ちで土を耕していたか、どんなおいしいものを食べていたのかなどを知りたくなり、具体的なことから農業や食を通して20世紀を研究するというスタンスで始めて、20年ぐらいになります。給食の歴史、トラクターの世界史、ナチスの台所、稲の品種改良などをやってきました。

槌田　藤原さんの農業との関係は生れたときから深い。お父さんが農業試験場の研究員だったのですね。

藤原　土壌肥料の研究をしていました。

現代文明社会は行き詰まる、飽食の時代は続かない　槌田

槌田　私は、小学校は左京区（京都市）の下鴨国民学校でした。

藤原　私の息子も下鴨小学校です。ご縁を感じます。

槌田　入学するまでは戦争の気配はそれほど強くなかったのですが、小学校に入学すると、職員室の壁には大きなアジアの地図があり、「勝った、勝った！」と侵略地に日の丸がピンで留められていました。威勢よく送り出した兄さんたちも、やがて白い箱で静かに帰ってくるようになりました。浮き沈みは世の常です。小学校4年のときに私は富山県に疎開し、そこで初めて農村、里山を知りました。「農村はすばらしい」というのが刷り込まれましたが、農村でも疎開した人びとはお腹をすかしていました。母親が男の子3人の食事の用意に困っていたことを知っています。

したがって私は餓えの問題、食料なしには生きられないことを忘れてカネに浮かれている現代文明社会は必ず行き詰まる、飽食の時代は続くわけがないと思っています。安定して続けられる農業は？　というところから有機農業へ関心が向きました。日本有機農業研究会ができたころ、私は京都大学の工学部の助教授で、学園紛争で学生たちから「何のための学問か？」と問われました。私は、それを真っ正面から受け止めようとしました。池田浩士さんも京都大学の造反教授でした。

藤原　おっしゃるとおりです（笑）。

槌田　私は造反したおぼえはないけど、批判を受けた。まともに考えれば行き着くところに行き着いたということなのですが、進歩そのものに疑問を持ってしまった。科学者をやめる背中を押してくれたのが日本有機農業研究会です。騒音公害で人びとに迷惑をかけている新幹線には乗らず、研究会のある東京へは夜行列車で通いました。

ビアフラの写真を見て、工学系から農業へ志望変更　魚住

魚住　私は生まれが山口県の瀬戸内の下松で、親父は石油会社の社員です。中高は横浜で過ごしました。1969年、受験に失敗して浪人したことが、どう生くべきかをじっくり考える非常にいい時間を与えてくれました。学園闘争が激化した時代で、予備校のある新宿、四谷界隈ではヘルメットをかぶった学生が機動隊とやり合っているのを日常的に見ていました。そのころ朝日新聞の伊藤正孝という記者が、ビアフラの子どもたちが餓えて死んでいく風景を『朝日グラフ』に掲載していました。私はそれを見て、どんなにがんばっても部品の仕事しかできない工学から、もっと全体を自分の身体で感じられる農業に志望を変えました。

1970年、農業技術者になって海外で救援活動をやれたらいいと思い、東京農大を選んで行った。ところが入った直後に、やはり『朝日グラフ』で水俣病の衝撃的な写真を見せられて、現地へ行って自分の目でそこの惨状を目のあたりにしないといけないと思いました。それが今の仕事にも反映されています。

ちょうどレイチェル・カーソンの『サイレント・スプリング』が翻訳されて、母乳からも毛髪からも水銀とかDDTとかの化学物質が検出されていました。そんなゆがんだ農業生産を国内でやっていて、そんな技術を学んで海外に持ち出したら、汚染を世界にわざわざ拡散してしまうだけだ、これは罪深いことになると気づきました。

大学でストをやって、自分たちの学問はどうあるべきかと問い詰め、神奈川県の厚木に田畑を借りて、そこで有機農業の実験を始めました。在学中の4年間は田畑を耕しながら生活をしました。そのモデルになったのが1年のときに読んだアルバート・ハワードの『農業聖典』です。これを日本で実証できれば、あるべき農業の姿を作りだせると思い、大学1年から取り組んで今日に至っています。

農業聖典

アルバート・ハワード 著

保田 茂　監訳
魚住道郎 解説

佐藤 剛・小川華奈・
横田茂永訳

日本有機農業研究会 発行
(2003)

会員価格 3600円 送料370円

※事務局にお申し込みください。

藤原辰史　ふじはらたつし
1976年北海道旭川市生まれ、99年京都大学総合人間学部卒業。02年京都大学人間・環境学研究科中途退学、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て現在、京都大学人文科学研究所准教授。主著に『ナチス・ドイツの有機農業』（第1回日本ドイツ学会奨励賞）、『稲の大東亜共栄圏』、『ナチスのキッチン』（第1回河合隼雄学芸賞）、『トラクターの世界史』、『戦争と農業』、『給食の歴史』（第10回辻静雄食文化賞）、『食べるとはどういうことか』、『分解の哲学』（第41回 サントリー学芸賞）、『縁食論』、『農の原理の史的研究』など。2019年、第15回日本学術振興会賞受賞。

ナチスは健康主義、有機農業を支持していた　藤原

魚住　藤原さんはナチスの研究から農業へ向かわれたとのことですが、有機農業に関心を持つようになられたきっかけは？

藤原　私と有機農業の出会いはたいへん不幸でした。ナチスを研究しているうちに官僚たちが有機農業に非常に深い関心を抱いていたという資料をみつけたのです。ナチスの収容所のトップにいたハインリッヒ・ヒムラーという人も含めて、今もドイツでさかんなDemeter（デメター）という有機農産物の企業の前身はバイオ・ダイオミック農業全国連盟なのですが、この有機農業を当時のナチスたちは支持していたので、「何じゃこりゃ？」と思ったのです。

私は、有機農業は平和の運動だと思っていました。大量に人を殺すことと大量に自然を破壊することはパラレルだから、有機農業を愛する方、やっていらっしゃる方は基本的に平和主義者だと思っていました。実際に槌田さんを含めそうでした。それに有機農業者は公害から入った方が多い。魚住さんから水俣病の写真を見られたお話をいただきましたが、人間がどうしてこんなに辛い思いをして傷ついて亡くなっていくのだろうということに、農業の視点から向き合った人が有機農業になっていくのですね。

そういう歴史を知っていて、ナチスを研究していたら、人間をネズミ以下だと思っているようなやつらが有機農業に関心を持っていた、という矛盾に陥ったのです。でも歴史学者はどうしてそうなったのかを解かなくてはいけないだろうと、それがモチベーションになりました。

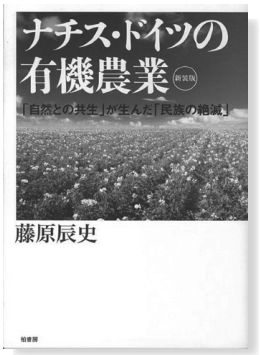
結論から言うと、ナチスはものすごく健康主義的です。胃ガンにならないように野菜を食べましょう、コーヒー、紅茶の替わりにハーブティーを飲みましょう、バナナやミカンの替わりにドイツでとれる地産地消のリンゴを食べましょうとか。健康と食を考える人たちがかなりいました。彼らの有機農業や健康食への関心は、二つの大きなモチベーションからなりたっていました。一つは戦争するために、ドイツを二度と餓えない国にする。戦争を起こして海外から輸入のルートを遮断されてもいいように、国内の食料自給率を上げる。

もう一つ、僕が絶対に許せないのは、有機農業で健康になるべきはドイツ人だけ、アーリア人種だけというナチスの考え方です。アーリア人種だけが有機農業を通じて健康であるべきだ。その反対に据えられているのは精神障害者、身体障害者、ユダヤ人、スラブ人、ポーランド人です。そういう人たちは餓えて食べられなくてもしょうがない人種というカテゴリーに当てはめられてしまいました。

ナチスがなぜ有機農業を支持したのかを明らかにして、日本の有機農業の歴史を調べてみたら、ここが違うのだと分かりホッとしました。それが私の『ナチス・ドイツの有機農業』、博士論文です。

槌田　ナチスだけでなく日本の戦前の政治もそうでした。当時、日本の農村出身の若者たちは栄養状態が悪くて優良な兵士になれない。政府は優良な兵士を作るために国民の健康を重視して、厚生省を作ったのです。

私は自分の健康をとても大事にしています。今朝もきっちり健康管理のため自分の課題をやってきまし



ナチス・ドイツの有機農業　藤原辰史
価格 3080円（税込）
柏書房（2012）

た。歳をとったからとへこたれていてはいかん。40年前、有機農業研究会の出だしのころ、自分はすごく不健康でした。健康になろうと決心することと、有機農業運動は私の中で一つです。食だけでなく生き方を変えるということです。

畑仕事も健康によい、畑自体が健康でないと有機農業はできないのです。有機農業研究会の初期に、農薬被害を受けた東京の大平博四さんをはじめとして、農薬中毒で苦しんだ人たちは真剣に有機農業に取り組むわけです。農薬を使っていた土地は殺されているのです。化学肥料を使う土地は健康な土地でない。そういう意味で健康の問題と土の健康の問題はつながっています。研究会の会誌は『土と健康』です。

「安全」だけの有機農業運動も反原発運動も危ない

槌田　ただし、健康の問題は危なかっしい。健康！ 健康！ という有機農業を僕はする気はなかったのです。

藤原　そこはすごく新鮮です。健康はうさん臭くみなければいけない。精神障害者が不健康だと言われていたなかで、健康でない人たちはどうするねん？ ということですね。ある一定の層だけが有機野菜を食べて農薬から免れて健康であって、それが幸せなのか？

槌田　無農薬で安全、ということだけを軸にする動きは非常に危ない。反原発運動もボクは「福島の野菜を食べよう」と福島の事故を受け止めました。でもこれは非常に評判が悪かった。悪いのは当然です、放射能は危険だから。でも、福島で子どもたちがあの事故に巻き込まれて福島の農産物を食べないと生きていけない現実がある。とするとこの世の中を作っているわれわれの責任の自覚が大事なのであって、放射能の危険だけを軸に考えていいのだろうか？　反原発運動についても僕は自分たちの文明生活への反省が先だと思っています。

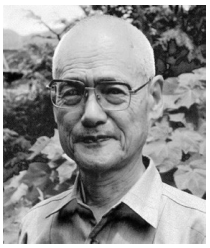
藤原　食べるか食べないかは別として、たしかに反原発運動も安全か安全でないかの軸によってだけ原発を批判するのは弱い、というのは槌田さんと同じ考えです。

僕が原発に批判的な目を向けているのは、ウラン鉱山は旧ドイツの植民地であった南西アフリカなどにあり、大企業が開発し、工場を建て現地の人たちが働いている。しかも女性が働ける場所として称揚されつつも、結局は被曝しながら掘っている。つまりリスクが海外へ移転されているのです。オーストラリアだとネイティブの人たちの聖なる山を削りながらウラン鉱山やレアアースを掘っている。カナダでも先住民が。リスクを周辺へ周辺へ追いやりながら健康だとか安全だと言っているのは、偽善というか、この列島にいる人たちだけが安全でいいのか？　そのことを脱原発運動では考えなくてはならないし、有機農業もまったく一緒だと思います。

魚住　福島の第1原発事故の直後から福島支援ということで、二本松の有機農業研究会の仲間たちと交流を持って、年に2回援農に行っています。年に2回程度だからたいして役に立たないのですが、毎回東京から15人程度が農作業に参加してくれます。彼らの中に入って原発問題、放射能汚染のことを考える。外から考えているだけではリアルでない。

水俣病の問題は、現地の人を訪ねることによって、彼らの沈み方というか暮らしぶり、苦しみを乗り越えてきた人が持っている温かさ、きびしさみたいなものを学ぶことができます。その人がそこで暮らしていくには、その土地の空気や水も全部受け止めて生き続けなくてはならない。

水俣病事件は意図的に水銀を垂れ流した企業を国が擁護して、それが今日まで続いている。国の原発政策も同じです。老朽化した原発であろうがなかろうが、事故を起こしたら二度とその世界に手を染めるべきでない、というのが私のスタンスです。あれだけ森、里、海に深刻な放射能汚染をもたらしながら、現地の人が立ち直れる施策やきちんとした償いもせず、原発の保守点検改良をすれば再稼働を容認するみたいなことが政策として続いています。それは許されることではありません。



槌田 劭　つちだたかし

1935年京都市生まれ。58年京都大学理学部化学科卒業。67年京都大学工学部助教授。73年伊方原発訴訟に住民側科学技術証人として参加。78年松山地方裁判所の非科学的不当判決に、科学技術そのものの社会でのあり方に疑問を持ち79年京都大学を辞職、京都精華大学（美術学部）教員に。73年使い捨て時代を考える会設立。75年安全農産供給センター設立。有機農業運動に関わり日本有機農業研究会幹事など歴任。主著に『脱原発・共生への道』、『共生共貧21世紀を生きる道』、『地球をこわさない生き方の本』、『工業社会の崩壊』ほか多数。共著に『原発事故後の日本を生きるということ』など

水戸地裁で原告勝訴となっている東海第1原発の裁判に、住民運動が権力に対して後退できない要所と思って関わっています。それは福島の漁民たち農民たち市民たちと連帯する闘いです。そこに実態として大きな被害を被っている人がいる、継続しているという事実を私は改めて認識してほしいと思います。

科学の傲慢と55年体制　槌田

槌田　原発は自分の人生をかけてしまったテーマですから、有機農業と並んで大事です。ニューヨークの9・11国際貿易センタービルの崩壊は、現代におけるバベルの塔の崩壊だと思うのです。今まさに崩壊過程に入っているという認識を持たねばいかん。その頂点に原発問題がある。原発は科学だと言われ、私は自然科学者として四国電力の伊方原発の裁判に関わり、証人にも出ました。もう50年近く昔のことです。

科学はもともと科（とが）の学、犯罪的なのです。サイエンスscienceはconをつけると良心conscienceになるのです。良心と結びつかない科学はサイエンス・知の名に値しない。罪科・「科（とが）の学」です。判決を聞いた78年4月28日、日にちまではっきり覚えていますが、判決を聞いた帰りの汽船の中で、僕はもうこれ以上、京都大学で仕事することはできないと決意しました。新学期は4月に始まっていましたから、その1年間だけは続けましたが、79年に科学者はやめました。サイエンティストではあり続けたいのですが……。それを決めたら拾ってくれるところがあったので、助かりました。科学は罪深い学問なのですね、だから科学的であるという傲慢さを恥じることです。

日本が講和条約を受け入れて独立し、戦犯容疑者、岸信介などが主導する逆コース、そして高度経済成長へとつながる55年体制。その政治が生んだのが、日本農業の化学化、単作化、大規模化を推進した基本法農政です。これがどれだけ間違っていたか。農薬や化学肥料を使うという、いのちを忘れてカネになる世界が進んだ。その中で農業では食えない農民が出てきたのですね。

基本法農政から10年たち、71年に梁瀬義亮先生たちの呼びかけを心ある農業者と協同組合の運動関係者が受け止めて始めたのが日本有機農業研究会です。いのちを大事にする観点を貫くとすると、いのちは多様性。土にはさまざまな数えきれない微生物や小動物が生きている、その上で生物が育つ。それを大事にしないで、自分の懐（ふところ）勘定だけで農業をやれるのかという問題を日本有機農業研究会が問うたのだと思うのです。

魚住さん、そんな理解でいいでしょうか？

人間以外の生き物に敬意を抱くハワード

魚住　はい、いいと思います（笑）。ハワードが土と植物と家畜と人間、土には中にいる微生物も含まれていますが、その一連のいのちの流れの中で、soil and health　ということを言いました。ハワードの妻が、夫が残した仕事は西洋の科学と東洋の知恵を統合させたものだと評価しています。それについて藤原さんは、どう考えますか？

藤原　ハワードが登場した1920年代半ばのインドという時代状況が重要だと思います。ハワードは、イギリスの植民地科学者という立場でインドへ行きました。酷な言い方をすると科（とが）をもった科学者としてインドへやってきて、そのときに「あれ？ 今までイギリスでやってきた農業は、ほんとうに正しい農業だったのだろうか？」と

気づいた。そこに東洋との出合いがあると思うのです。彼は、農業に対しての理解があるりっぱな方だったと強く感じるのですが、その透徹した目線が東洋と出合わせて、自分のイギリス帝国というバックボーンが徐々に小さくなっていく。

彼のすごいところは、槌田さんの話に戻りますが、健康（ヘルス）という言葉を解体した。人間だけの健康でなく、土壌の健康、微生物の健康、植物の健康、動物の健康は全部一貫してつながっている。健康は地位を上げるためや自分が長生きするためのものではない。あらゆる生物がつながっているリンクだという、西洋科学では出てこないところに到達した。ハワードは、植民地学者としての自分を解体できた。ガンジーの影響もあると書いていますが、変えたのはインドの農民の堆肥の作り方だったと思うのです。インドの農民に学んだまさに現場の思考だったことが一つです。

もう一つは、魚住さんたちの翻訳のおかげで分かったことですけど、ダーウィンを非常に高く評価しているところです。進化論ではなく、ダーウィンの晩年の仕事、ミミズです。「ミミズはどうして土を掘りフンを出し、建物を傾かせるぐらいまで土壌を耕すのか？ 人間の技はどこにあるのか？」と気づく。人間以外の動物に敬意を持つというハワードのあり方はとても20年代的だと思います。

殺した感覚を持たない機関銃と毒ガス　藤原

藤原　その背景には、第一次世界大戦があったと思います。１９１８年まで大戦があって、そこで西洋の諸国は兄弟殺しをやりました。資本主義は競争原理なので、経済原理に従う以上、争わなくてはならない。お互いほとんど同じ文明圏にいた人びとが、ロシアとフランスとイギリス側、ドイツ、オーストリー、ハンガリー、トルコ側で戦争して、いとも簡単に銃弾で大地ごと吹っ飛ばして、２０００万人と言われていますが、人が死んでいった。目をつむって機関銃で撃って人が死ぬとか、いのちの感覚を著しく軽減するような戦争をやっています。

槌田　機関銃と毒ガスですね。

藤原　そうです。その毒ガスと機関銃の戦争を経験したうえで、ハワードがインドで堆肥づくりを見た。西洋科学である西洋科学がけっきょく人間の殺し方の軽減に役立ってしまう。インド訪問がその経験のあとにある点を大事にしたい。

戦争は第一次大戦で大きく変わりました。くり返しになりますが、人を殺している感覚がなくなった。20世紀の戦争の中の最大の発明は毒ガスだと思っていますが、この毒ガスが戦後、平和的転用によって農薬に使われました。農薬の使用は、「この空間内で害虫は無くなっていってほしい」と、農業する感覚を戦争化してしまう。そこはけっこう重要なポイントではないかと思います。

たとえば畑で綿花を作ろうとすると、当然いろいろな生物がやってきて人間の邪魔をします。お互いに迷惑をかけ合う。どっちかを殲滅するのでなく、お互いに介入しながらやりとりする。それが農業だと思うのです。

精神、戦争、環境、三方から押し寄せる危機　藤原

魚住　かつては下肥を使っていましたね、日本でもアジアでも。フランクリン・H・キングが『東亜四千年の農民』（杉本俊郎訳　栗田書店１９４４）という本を書いていますが、川底に溜まっていたいろんな堆積物を肥料として還元したり、下肥を貴重な有機性肥料として使って、農業は長い歴史を積み重ねてきたわけです。ところが化学工業が農業分野に進出し、手軽に使える農薬と化学肥料が定着したことが大地をいため、人びとの健康被害にも関係している。

藤原　第一次大戦がきっかけだったのはハーバー＝ボッシュ法というのがあって ― これは槌田さんのお父さまの槌田龍太郎さんが批判されていた硫安、１９２０年代にドイツ、イギリスで広がっていくわけですが ― 無限に存在する空気の窒素を膨大なエネルギーを投じて

固定化して肥料ができてしまうことになった。それだけでなく火薬にも使用されるようになった。戦争も農業も、どちらもＯＫというデュアルユースです。

実は有機農業運動がやってきたことは、教育の問題も含めて、今こそすごく求められている物の見方を与えてくれると思っています。なぜかというと、戦後、１９６１年の基本法農政は「おカネをもらうことによって農家が幸せになる」という間違った観点から導かれたものでした。だけど今、若者の間で「幸せってなんだろ？」というときに、「すごいリッチになってプールつきの家に住む」と答える人はほぼいません。かつてのような上昇志向の夢を抱くことが無理だし、抱く必要もないと思い始めている。

もう一つは新しい冷戦時代とも言われ、中国の軍事力がものすごく強くなり、アメリカの軍事力とガチンコになっていく中で、南西諸島、八重山諸島と琉球が要塞化し始めています。自衛隊が与那国島とかをがんがんブルドーザーでならして台湾上陸に備えるような形を作っている。中国は軍事力と監視技術力、ＡＩ力を身につけている。日本はアメリカの傘下なので、いわば日本列島が米中の対立の中心にすわっている。そんな中で、「ちょっと待って。戦争はやめようや！」という思想を問う、というのが二つ。

三つめは今起こっている地球の危機。今に始まったことではないと有機農業研究会が言うとおり、１９６０年代の高度成長から続く地球の破壊の延長にすぎないとは思いますけど、これだけ国際世論が高まっている中でもう化石燃料を使っている場合ではないし、国連もびっくりして国連土壌年を定めたほど土壌を痛めつけ、土壌が流出している状況だということ。

精神の危機と戦争の危機と地球環境の危機が私たちに押し寄せています。三方同時展開できる思想、三つをうまく耕すような思想、これには有機農業に関わられてきた梁瀬義亮さんをはじめ、初期に生れたいくつかの言説が私には役立ちます。

金主主義国家という構造　槌田

槌田　歴史的に言うと、日本が〝豊かな道〟への暴走を始めたとき、何を選んだかというと、お金です。金主主義です。リンカーンの言葉になぞらえると、「お金の、お金による、お金のための」社会・政治です。これは構造的な問題であり、人間の問題です。なぜ構造的に変わっていったのか？　基本法農政下の補助金は農民を甘やかしたと言われますが、農民を甘やかしたのではない。カネは流れていくもので、あのカネが最終的に落ち込んでいるのは化学会社、機械会社です。そして農民に残ったのは借金だけです。

藤原　流れがそうなった。

槌田　それに対する批判として、有機農業研究会は始まっていると思うし、僕の今の考え方は初期の農民の皆さんに教えられたことによっています。たとえば「農薬は病虫害を防ぐために撒いているのではない、商品価値を上げるために撒いているのだ」と。典型的には斑点米を防ぐためのカメムシ防除です。「米に斑点米が入ったら等級は下がる、撒かざるを得ない」「虫食い野菜は売れない」と教えられたのです。

消費者が農家をこういう農業に巻き込んだのを聞いて僕は反省しました。要するにすべておカネのためなのです。そんな世の中が政治腐敗を呼んでいる。有機農業運動が残念ながら広がらないのはカネが支配する社会だからです。提携の消費者自身も巻き込まれがちです。だから「使い捨て時代を考える会」も低迷、じり貧気味です。この状態からどう脱皮できるかが重い課題であり、全国の提携団体も軒並み崩壊の危機にあります。

藤原　そうですか。

槌田　その危機感をどう受け止めるかが、今後の有機農業運動のテーマになってくると思います。農薬で苦しんだ農家の経験の中から生まれ的た有機農業は、金銭的世界で広がるはずがないのです。今は有機

野菜なら高く売れるというＪＡＳ法の世界になっています。これは魂が失われたままに進んでいるような気がしますけど、言い過ぎでしょうか？

魚住　生産者と消費者が互いに支え合っていくということは理念的には正しいのですが、ＪＡＳ有機で認証をとって生き延びる生産者もいると思うのです。差別化して自分のものを高く売りたくてということで有機認証をとっている生産者ばかりではなく、必要に迫られて。

消費者が用意されていたり、消費者グループがあったり、取り組みやすい環境にある生産者はいいのですが、そういう消費者組織が高齢化で崩壊しつつあり、提携の枠内だけは生き延びられない生産者が、自分の生産方法に理解を示してくれる流通関係に卸そうとすれば、有機認証をとらざるを得ない現実が待っています。

有機栽培の表示を国が規制したことが有機農業運動の芽を摘んだと私は思っています。国が「みどりの食料システム戦略」で国土の25％、１００万haの有機栽培を目指すなら、生産者がもっとおおらかに自分の農産物を「有機栽培で作ったので食べてほしい」と言える環境にならなければいけない。私は、それを自分たちの手で取り戻す運動が必要だと思っています。また、自分の足下の食料自給率もほったらかしにして、外貨獲得みたいなところに補助金をつけている。ほんとはネオニコチノイドとかグリホサートとか規制をしなくてはいけないのに。

藤原　有機農業の未来は暗いと、お二人はおっしゃっていますが、産業としての農業 agricultural industry の未来は暗いかもしれないけれど、お二人のお話は、今一番求められているものの考え方、文化だと思うのです。

一周遅れの有機農業はやがて最前線を走る　槌田

藤原　農薬企業の話に戻りますが、ぼくが注視しているのは魚住さんが『アサヒグラフ』で見た水俣病をはじめとする公害です。日本窒素肥料株式会社は言うまでもありませんが、新潟水俣病の昭和電工も元々肥料会社です。私が大事だと思っているのが四日市公害、大気汚染が住民を苦しめたのですが、最初に苦しんだ人たちは漁民です。四日市コンビナートからの廃液に油が混じって魚が油臭くて売れなくなり、漁民が抗議をします。それだけでなく、第１コンビナートを形成していた企業の中には、石原産業という農薬企業もあります。

農業に直接関係している企業が公害の原因になったという現実を見てみると、本来、農業はインプットだけの世界でなく、アウトプットまで面倒を見て、まわしていく文化だと思うのです。有機農法は生産物を作っているだけではありません。土をメンテナンスしている、環境をメンテナンスしている、さらに私たちや家畜の排泄物ももういちど何とか循環の糧に持っていくのです。

今、若い人たちの多くは、これだけ地球の危機だと言われ続けていて、とことん未来に不安を抱いている。そこで求められているのは、おいしい食べ物はもちろん、おいしい哲学。と言うとキャッチコピーみたいで軽くて嫌だな（笑）、多方面に対応できるものの考え方、思想です。

槌田　今、一番先を走っていると思っているおカネの世界は息切れしてきて、世界の経済もコロナでかなり行き詰まりが目立ったと言われています。一周遅れでゆっくり走っている世界に入りつつあります。気候変動が世界的に難問です。物質文明が地球の限界、資源と環境問題に直面するからです。ＳＤＧｓでは間に合いません。脱成長に進む以外にないでしょう。

有機農業は遅ればせながらその受け皿を用意しながら走ってきた。生きるということにつながっているわけですから、やがて最前線を走ることになるに違いない。そういう意味で自信を持って、焦らず、一周遅れをゆっくり走ったらどうか。

協同組合の原理原則とは

槌田　一楽照雄さんは早い段階から「有機農業運動の中に協同組合の思想を！」と言い続けてこられた。協同組合の思想って何だろうか？今の協同組合は、農協も生協も、世の中の金主主義に毒されていると思います。一楽さんのおっしゃった協同組合は何でしょうね？

魚住　一楽さんが戦前の産業組合中央金庫から全国農業中央会に身を置き、そのあと協同組合研究所の理事長をされて、最後、有機農研を設立された。あてがいぶちの協同組合ではなくて、本来的な協同組合。資本主義社会の中で、協同組合を提案していく場合、協同組合の哲学がきちんと理解されて、支え合っていく組織なのだ、仲間たちなのだということが、教育や学習の中で自然に芽生えていけば、それはホンモノになっていくでしょう。農協は農民の統治機関として国が押しつけたような側面が強くあるし、農民が自主的に団結して作った組織でない。本来の根っこが生えていない組織だと理解しています。

かつて一楽さん自身も「この有機農業運動を農業協同組合の中で展開して、問題提起をしなくてはいけない」と語られています。数年前に、「これから全面的に有機農業にしていく」と言っている東徳島農業組合の組合長と出会いました。そして私の地元の農業協同組合「ＪＡやさと」では、毎年２家族の新規就農の有機生産者を、研修制度を利用しながら入れています。そういう流れで新しい有機の担い手を増やしていき、協同組合の中から有機の意味合いを考えていく、仲間を増やしていく、地域に根を下ろしていく、それが学校給食にも採用されるような素地を作り出していく。

協同組合は、われわれが一楽さんと共に作り上げた生産者と消費者の協同という、支え合い理解し合う思想を既成の組織の中に還流させて、世代交代を機に脱皮できたらいいなと願っています。

藤原　私は協同組合論を書いたことは一度もないので理由が分からないのですが、あちこちの生協や農協などからの講演依頼が多いのです。農協には「早急に有機農業宣言をまとめてください」と言っています。協同組合は、もう一回原理原則に戻るべきだと思うのです。

何が原理原則かというと、二つ考えるべきことがあります。一つは、歴史学的に協同組合は19世紀に始まりました。資本主義が世界にワアーッと広がったときに、みんなでリスクをカバーし合わないとやっていけなくなった。あのときは雹が降ってきて穴があいてしまい、みんなでカバーしようと。仕方なく皆で助け合おうというものです。これを１９００年に日本が導入したのが産業組合でした。原点に帰ると言うなら、いったん農協解体してもう一回、それぞれの地域でそれぞれの地域に合った農業の協同組合を作り直す。生産者と消費者が一緒に作り上げる新しい生産者及び生活者農業組合とか。講演依頼があったワーカーズコープというところは、労働者が会社ないしは事業所を運営しています。

「待つ」思想（待ちながら楽しむ）　槌田

藤原　有機農業はグローバル経済に押されている、その現状の中で自然に湧いてくるもの、槌田さんの発想は「待つ」思想だと思っているのです。槌田さんは強制をすごくいやがるではないですか。

待つというのは誰かの想像、アイディアが湧いてくるのをじっくり待ったり、ちょっとつついたりするみたいな、協同組合の重要な意思決定のあり方だと思うのです。なぜかというと、協同組合と株式会社の一番の違いは、おカネで一票なのか、一人一票なのか、金主主義の一票なのか、どんな人間でも一票なのだという圧倒的な思想の違いを思い出すべきだというのが一点。

それから二点目。私が大好きなイタリアの植物学者にマンクーゾという人がいます。「植物は他の生物に対して軽視されてきた。植物の復権だ！」と言う人です。「植物は動けない、動物は動けると言うけれど、それは傲慢だ。植物に一日ビデオを置いてみたらメチャメチャ動いてい

る。植物は動けないのではなく、その場に根を張るという選択をしたのであって、きみたちは根を張れないだろう。根を張るというのは土壌内微生物を共生する能力を身につけたということ。そんじょそこらの人間とは違うのだ」、というような口調でひたすら植物を持ち上げていき、「動物は首を切ったらさようなら、神経系あるいは心臓をぐさりとやったら死んでしまう。これは中央集権だ」と言うのです。

雑草とたたかっていらっしゃる魚住さん槌田さんはご存知のように、憎き雑草たちは……。

槌田　憎くはない（笑）。

藤原　私はまだ修業が足りないのですね。

魚住　ちょっとだけね（笑）。

槌田　雑草のおかげで作物が育つのです。雑草は栽培作物とはぜんぜん違う、育つ力が強い。ボクは有機農業に入ったとき、野草摘みのパーティをやりました。その時に、引率してくれた京大植物園の方が「雑草が生えなかったら地球はどうなると思います？　畑に雑草が生えなかったらいいことのように思われているけど、雑草が生えるから水持ちもいいし、土も乾かない、根が土を砕いてくれる、だから目の敵にするものではありませんよ」と。その教えられたことを含めて「待つ」ということ。手作り味噌をつくるとき、待つ気がなければ糀はできません。糀の言い分を聞いてやれなければ。

現実を直視したら、現在の協同組合はある意味どうしようもないのです。どうしたら良くなるかです。その点で愛媛有機農業研究会は、すぐれた有機農業提携団体だと思っています。協同組合をちゃんとやっている。また、本会の前理事長、佐藤喜作さんの秋田県仁賀保農協での自給運動がありました。50％自給運動を組合員の収入から考えるのではなく、組合員の生活から考えるということを熱心にリードされてきた。だから協同組合の中にも希望はあるし、希望は続いていく。それをどう伸ばすか？　その時に先ほどの待つこと、むしろ楽しむこと。

藤原　待ちながら楽しむ。

槌田　相互理解の互助共生には気楽な楽しみがある。「縁食」のように。

藤原　縁はすごい強いロープでつながったものではなくて、切ったり離れたりしやすいものです。

槌田　提携の運動は縁をつないでいる。喜びを共有できる喜びがある。

藤原　なるほど。喜びを共有する喜びという、もう一つ大きな段階の喜び。協同組合の精神ですね。

槌田　消費者の喜びを喜びとする生産者。喜びを伝え合う関係が提携です。協同組合は農業者と消費者が一緒になったら、お互いの矛盾もあり混乱も起こりやすい、だから勉強になる。そんな形で小さく始める。

藤原　それがマンクーゾの話とつながっています。彼も、憎き雑草とは言いませんが（笑）植物は四分の三を失っても、根が少しでも残っていればまた出てくる。植物には中央集権的でない組織のあり方があるのだと言うのです。それこそが、協同組合でした。

槌田　「遠慮してね！」という除草はあります。僕は根から引かない。稲刈り用のカマで上を刈るだけ。根が土をよくしてくれます。

土壌菌・種取り・人の社会、いずれも共生　魚住

魚住　農家は通常は田んぼの畔の草を刈り払い機で刈ります。「遠慮してね」というのは、土手に草があまり繁茂してしまうと歩きにくくなるし、マムシの住みかを作ってしまい、通気性が悪くなり景観上も悪いからです。ところが刈り払い機はケガをすることも多く、高齢化で体力がなくなった農家は除草剤を使うようになってきました。風景として赤茶けた色が緑の中でかなしいものがあります。使いすぎると土手がザーッと崩れてきます。大雨が降ったあと、弱い部分から一気に崩れだす。草の根っこが残ることがどれだけ重要か。刈られても刈られても芽吹いて、土手を守るのです。

除草剤を振れば、見た目はいったんはきれいになりますが、土壌が

魚住道郎　うおずみ みちお
1950年山口県生まれ。東京農業大学在学中の70年、アルバート・ハワード『農業聖典』に出会い、有機農業を志して、試験畑を耕す。大学卒業後の73年たまごの会農場建設に参画、同農場従事を経て、80年茨城県石岡市で専業有機農家として独立。共著著に『有機農業ハンドブック』『「有機農業公園」をつくろう』『食と農の原点 有機農業から未来へ』、「解説 有機農業のバイブル」『農業聖典』、「参考 有機農業の古典」『基礎講座 有機農業の技術』ほか。2018年日本有機農業研究会理事長に就任。有機農業推進協会理事。
13年第17回環境保全型農業推進コンクール大賞（農林水産大臣賞、有機農業部門）受賞。

単粒化して季節風で表土がはぎとられていきます。とくに2月3月、春一番のころなどは舗装道路の片側に山のように吹きだまってしまう。道の境界が分からないくらいに土壌浸食が起きています。

ムギとか野菜とか冬場に作物を作っておくことが土壌浸食の防止にもなります。有機栽培でやっている畑であれば保水力があって、団粒構造はきっちり作られていますから、起こしてある畑でも風蝕は起きない。ですから有機農業をやっている意味はものすごくあると思います。

土壌の中の糸状菌とか菌根菌は、動物でいうと腸内細菌に近いもので、作物が栄養を摂取する境界面に寄生・共生している微生物です。堆肥づくりで、その植物残渣と動物の糞尿を混ぜ合わせると微生物の交流が始まります。

われわれが積極的に作る堆肥は、もみ殻、おがくず、落ち葉だとか、そこへ動物質のウシ、ブタ、トリの糞尿を少し加えて、米ぬか等で発酵させて、それを畑や田んぼに還元して作物を育てている。その微生物が作物を病気から守り、病気になっても回復する力になる。

藤原　免疫力ですね。

魚住　そうです。有機栽培で種取りして何代かすると、病気に対して完璧に強いわけではないが、味はいいし、けっこういのちを長らえて保っているので、これでいいのかなと。「選抜していいのを残す」というのが一つの歴史観というかサイエンス観として植えつけられてきたが、私は最近そんなこと考えません。この気候でこの風土で今年生き延びてきたいのちを次の世代に伝え残していくほうが、結果的にはここの地に合った種として生き延びられるのではないかと思っています。大豆、小麦、米などいろんな作物の種を採ってきていますが、異常気象にも強くなっていってくれるのではないかと、かすかな期待と願望があります。

われわれの有機農業は百花蜜というか雑蜜の世界だと思うのです。いろんな花を交配してくれる仲間として、日本ミツバチや西洋ミツバチがいて、彼らが生き延びられる環境を残してやる。子どもらに自然を残し、豊かな感性をみがきながらいろんな勉強を深めていってほしい。そのときに有機農業というテーマから掘り進んでいったら、「こんな楽しい豊かな世界があるのだ」と気づいてもらえるのではないかと。

私自身もこの50年、有機農業の現場で生きさせてもらって後悔がない。おもしろいのです。われわれは毎日、家畜や作物の成長に付き合いながら大事に大事に育てて消費者の口に届ける。こういう生産活動、日常生活をやっている現場に、ウチの提携の消費者の人たちはすごく喜んで来るのです。今はコロナでお断りしていますが、コロナがおさまればまた復活します。

その力が福島へも行くのです。福島へ行って少しでもお役に立ちたいと。自己満足と言えば自己満足かもしれないけど、そういう縁ができて、不幸な事象の中にも、今まで気づかなかった新しい人と人との豊かさを生じ得るのだなと感じてきています。

ただ作って食べるという行為だけでなく、藤原先生が『縁食論』でお書きになった食を通じて人と人がつながっていくような、森、里、海の人びとが一つの利益受給圏と言いますか、人のつながりも含めた小さな社会が支え合う連帯を、日本でまた世界の中で作り出していければ、ギスギスした争いごとの中に引きずり込まれず、それをはねのける抑止力になっていくと思っています。

「雑」「待つ」「縁」 藤原

魚住　では、最後に一言ずつ。

藤原　自分はすごく弱い人間で、すぐに雑草に怒りを燃やして、すぐに虫の上に害をつけて、やっつけてしまったりする。今日のお二人の話を聞いて、こういう人たちがいるから弱い私はがんばれるのだと思いました。株式会社も資本主義も、スティーブ・ジョブズのような強い経営者、強いリーダーシップを求めています。だけどそうでなくて、もっとしなやかな組織を、自然農法や有機農法をやっていた方は考えていたということを改めて発見しました。

　そのキーワードは、「雑」です。雑っぽいものがワーワーいると土手も守られるし、弱いも強いもカッコいいもカッコ悪いも共存していることが、社会のしなやかさを作ってくれている。

　それから「待つ」。「ちょっとごめんね」と草を刈って待っていると、群れて芽生えてくる。一人ひとりは弱いけど、群がって待っていると自然にポコッと、しかも個性あるものが雑っぽく混ざってくる。そんな人間のあり方を私は「縁」と呼んでいます。

　人間と自然の関係もそういうものだと思います。いろんなクラスの小さな微生物が雑っぽく混ざっているというのが農業のあり方です。私たちの身体も、人間と食べ物という一対一の関係でなくて、食べ物にくっついている微生物や私たちの腸内にいる微生物たちとの境界領域での盆踊りみたいに、みんなでワーッ！というところで成り立っている。ということをお二人のお話から学ばせていただきました。

　縁が単に農業、有機農業に関わらない問題であるということが、おそらく希望だと思っております。ありがとうございました。

「生きる」とは、続けること 槌田

槌田　小さな自分が直接見たこと聞いたことの中でしか考えられていないので、不十分なのは仕方がない。そういうものだと思ってあきらめるわけではないが、納得することも大事です。

　こういう世界に入る前の自然科学者であった時の自分は、いったい何だったのか？ ひと言で言ってしまうと進歩史観です。生物は進歩するものではないと思えるようになった。進歩しないけど、物事には耳を傾け、よいと思うこともオカシイと思うことも間違いなく選び取っていくしかない。

　僕は今日の話は総じて「縁」だと思うのですね。縁はそんなに強い支配力を持たない。縁に導かれて可能なことは可能になるし、不可能なことにもいくらかの可能性を見いだす。生産者の持つ能力、消費者の持つ可能性、それを縁で寄せ合ってきた提携の運動を僕は再評価する時期に来たなと思っています。

　何とかしたいけど、トシなので自分にはもう力がない。そう思うと、嬉しさばかりでなく寂しさもあるけれど、寂しいと思うのは傲慢で、そこから始まります。今自分が生きているのも父親と母親の愛の戯れの結果なのです。愛で戯れるのも大事で、しゃっちょこばって考えないほうがいいなと。

　生きるというのは続いていることなのですね、続いてきたからこそ自然治癒力も免疫力も獲得してきた。野生の世界でバイキンたちは「こうしたら正義が貫ける」などと思っているわけでなくて、ひたすら生きるために試行錯誤を繰り返して、すばらしい世界を実現しています。

　だとしたら、続けることです。世代を越えて、どう伝えていくのか、しかも納得できる伝え方でなくてはならない。息子が三人、そして孫がいますが、私とは別世界（笑）。ですけど、やはり親から子へ、孫に伝えていく、そんなふうに思って、まあ気長に行きましょうよ！

藤原　いいですねぇ（笑）。戯れながら気長に行きましょう！という結論はいいですね。

魚住　今日は先生にお会いできて光栄に思います。今後とも何らかの形で日有研と交流をはかっていただけるとありがたいと思っております。

藤原　こちらこそよろしくお願いいたします。

魚住　今日はありがとうございました。